

# 山っ子通信

No 33号

2023年6月11日



## コンテンツ

・クロニクル	
宝剣岳中央稜・第二尾根	1-2
剣岳・八ツ峰上半縦走	3-5
小豆島・赤嶽	6-8
記憶の残る山（千丈ヶ岳南西壁）	8-12
オフビレイ（編集後記）	12

## 宝剣岳 中央稜、第二尾根

2023/04/22～23

メンバー：MH、岳友 S、HH

今シーズン最後の雪山。このシーズンは自分にとってずいぶん充実した山行が出来た。そして、少し疲れの残った感覚がある。重い荷物を背負って、延々と続く白い稜線を歩くのは魅力的だ。クライミング要素の強い山行も好きだが、歩くことを主体にした地味な登山の方が自分には向いているのではないかと思う。でもそこには現実としては体力の問題がある。気力の問題もあるのかもしれない。

冬山シーズンの出口に立ってみて、そろそろ疲れが出始め、さらにその先には乾いた岩のクライミングが見えて来た。そんな時に岳友 S から宝剣岳中央稜の話がされた。宝剣岳といえばロープウェイで山頂直下まで上がってしまうのでずいぶん楽だ。さらには宝剣岳東面にあたる中央稜の裏側、つまり西面のいくつかの尾根について記録があり、以前から気になっていた。短いルートであるものの難易度は高い。最近フリークライミングをしていなかった自分にとって（そして MH さん、岳友 S にとっても）やや不安はあるものの、まずは行ってみたいと分からないと思い、再び金曜日の夜に関西を出発した。

### 4/22（土）

菅の台バスセンター駐車場には 3 時に到着した。最近多かった北アルプスに比べるとずいぶん早い。広大な駐車場の端に車を停めて、脇にテントを張って仮眠する。この週末は気温が低いとのことで、この標高でもすでに寒かった。3 シーズンのシュラフを持ってきたことを後悔する。

7 時の始発バスに乗り、おおよそ 1 時間後にロープウェイ終点に到着した。雪山登山者は多い。風は少し強いが天気は快晴。真っ白な千畳敷カールの雪面に、登山者が一筋の黒い線となって青い空につながっている。

10 時には宝剣山荘のテント場に到着した。ここから西面第二尾根の下降路はすぐ近くである。早々に装備を整えて出発したいところだが、テント場の整地に時間がかかった。適当な場所にテントが張れると思っていたので、シャベルを 1 つしか持っていなかったのは失敗だった。この移動距離なのだから重くてもザックの横につけておけばよかった。斜面を削り、風よけのブロックを積み上げ、テントを張ると不要なものの中に入れ、装備を整え、ようやく出発となった。

第二尾根は宝剣岳山頂の直下に連なる尾根で、トポによるとすぐ横の B 沢をクライムダウ



ンして取付く。私達も B 沢を探したがどうもはっきりしない。第二尾根すぐ横にそれらしい沢を見つけたが、クライムダウンするにはやや傾斜がありそうな気がしたので、近くの岩を支点に懸垂で下降する。1 ピッチ分を下降したが、その下はさらに急斜面となっており、クライムダウンするルートのようには見えない。どうやら降りる沢を間違えたらしい。時間的にも残りが少ないため、そこから第二尾根に取り付くことにした。見上げると第二尾根最終ピッチの岩峰が見える。まずはそこを目指して雪のついたルンゼを岳友 S がリードする。なかなか感じの良いピッチなのだが、おそらく手付かずなのだろう。残置は何もないので、カムやイボイノシシを使つてのクライミングだ。途中で 1 ピッチ切って、第二尾根の最終ピッチ取付きに到着する。目の前には 5m ほどだが難易度の高い壁が待っている。アブミを出した岳友 S も悪戦苦闘である。わずかな残置を使いながら何とか突破してくれた。そこからはそれほど難しくはないが、2 ピッチほどに分けて 15:30 に山頂まで到着した。人はいない。天気は良く、遠くまで見渡せる。

4/23 (日)

MH さんの体調が良くない。もともと高山に弱いと言うのもあり、頭痛がするそうだ。MH さんをテントに残して、岳友 S と HH の二人で中央稜へ向かう。

5 時にテント場を出発し、1 時間後には取付きに着いた。もちろん人は居ない。ロープウェイもまだ動く前なので、千畳敷カールを歩く人もいない。

1 ピッチ目は目の前のややハングした壁の左側から巻いて登った。無雪期に登った時は右側から行った記憶が微かにあるが、アイゼンを履いた状態で傾斜の強い右側から登る気にはなれない。岳友 S がリード。フォローで登った私もよくぞリードしたと思うほどの大変なピッチだった。

2 ピッチ目は HH がリードする。すっきりとしたルンゼ状の壁で、ひたすらロープを伸ばす。クライミングシューズであればさほど難しくないこのパートもアイゼンを履いているとなかなか手ごわい。



何とかピッチを切ると、次はもう上部のオケラクラックにつながって行く。オケラクラックも四苦八苦である。足がクラックに入らないので、カムを掴みながらじりじりと前進する。

傾斜の緩い岩と雪面が混じる最終ピッチを HH がリードし、10 時を過ぎたころに山頂まで抜けた。何人かは山頂にやってくるが人は少ない。荷物をまとめて 11:30 にテント場に戻った。「早かったですね」とテントから顔を出した MH さん。思ったより元気そうである。そこから荷物をまとめ、あつという間にロープウェイ駅に到着した。相変わらず天気は良く、色の濃い空が宝剣岳の後ろに広がっている。これで今年の雪山は終了となった。

## 劔岳 八ツ峰上半縦走

日時：2023年5月2(火)夜～5月5日(金)

メンバー：LTI、岳友YI

行動記録：

2日：21時50分梅田発夜行バス→23時15分京都発→富山駅

3日：5時52分富山駅→7時15分立山駅着→8時20分立山発(予約チケット)→10時室堂発→13時劔御前→14時劔沢キャンプ場→19時45分就寝

4日：1時45分起床→3時20分出発→6時20分八ツ峰5・6のコル→13時八峰の頭→18時20分劔沢キャンプ場→21時就寝

5日：5時起床→8時出発→12時30分室堂→みくりが池温泉→立山→富山泊

八ツ峰縦走は2013年GWに劔沢ベースで1・2峰間ルンゼから登り、8峰手前で時間切れ敗退し、長次郎谷を下って20時過ぎキャンプ場に戻った経験がある。

今回は、劔沢ベースは遠いので、テント担いで1・2峰間ルンゼから下半・上半を登り、本峰経由して劔沢に戻るのはいかがでしょうかと考えていたが、相談した結果、八峰上半を縦走、順調にいけば本峰経由して劔沢に戻る計画にした。

2日：梅田からの夜行バスに乗り遅れるという大失態！しかし、私は2回目の経験。前回は慌てて新大阪に行ったけど間に合わず、それから京都へ行ったから結局間に合わず、大変な思いをした。今回は直ぐ京都に行けば間に合うと計算し、京都駅から無事に乗車できた。何事も経験は大事です。

3日晴れ：富山電鉄は外国人観光客が多かった。寝不足なので電車で寝ようと思っていた



のに、車窓から見える裏劔の稜線がカッコ良くて見ていたかったのと、正直乗り心地が悪いので眠れなかった。ケーブルは事前予約していたので、時間まで朝ごはん食べてゆっくりした。室堂で計画書を出すと「すごく大変ですよ。前劔の状態が非常に悪いので注意して下さい。エスケープはどう考えてますか。よく分かっているとと思いますが、平蔵谷も上部は割れているので暗くなったら

危ないですよ。」と注意を受ける。まあ、この時期に劔岳山域に入ると必ず注意を受けるが、今回は女二人だから特に心配されたのかもしれない。「分かりました。気を付けます。」と挨拶

搦して出発する。天気が良いのは有難いけど、半袖で歩けるぐらいに暑かった。GWなのに剣沢キャンプ場のテントはまばら、昔は兵庫の各山岳会の人たちと会えていたのに、なんか寂しい。それでも大阪岳連の仲間や、M山友会、Y山岳会の仲間に来て嬉しかった。皆、明日は源次郎尾根らしい。他の人達も含めて10パーティーほど入りそうだ。八ツ峰に登る人は誰もいなかった。

4日晴れ：1時45分起床にしたのは悪あがきで、少しでもゆっくり寝たかったからである。



る。月明かりが明るいから不安なく剣沢雪渓を歩けた。その途中で「TIさん、忘れ物しました！」と報告を受ける。懸垂のバックアップ用スリングとルベルソを忘れたらしい。おまけに「ムンターもあまりやったことないので自信ないです。」と、昔の私なら、『やる気あるのか?!』と、叱っていたと思うけど、たいした事ではないし、今回は長い縦走だから急ぎたかった。「そんなのどうにでもなるから、とにかくスピードが大事やから、頑張っ

て歩こう。」と促した。長次郎谷雪渓取りつき、1・2峰間ルンゼ取りつき、5・6の科尔にはテントを張った跡がある。まあ、普通は八ツ峰やるならそうするよね。今回は担いでは絶対に登れないと言

い張るYIちゃんの希望で剣沢ベースにした。5・6の科尔からだし、頑張れば縦走できるだろう

と思っていた。しかし、予想に反して6峰の登りからいきなりの岩登り。「今シーズンはアイゼントレしてないからリード自信ないです。」と。先行の5人組もロープを出して2パーティーで登っている。我々もロープを結んで私がリードで登ることにした。6峰の取り付きから先は雪稜なのでロープは必要ないけど、雪が割れていたり不安定な雪だったのでコンテで登った。先行は全部スタカットだったので、「先に行っていていいですか。」と声を掛けて行かせてもらった。そこからはずっとトップを進む事になる。クライムダウン出来るような状態ではなかったので懸垂を数回繰り返す。8峰の登りは雪が付いていると単なる雪稜なのに、岩稜とハイマツとちょっとした雪稜のミックス。ハイマツ掴みながらやったら行けそうやけどどうする?と聞いたらやるというのでビレーした。途中から動かなくなったので、確認すると「(ヌンチャク)玉切れです。」と言うので交代することにした。確かに岩はバランスが悪く嫌らしいし、雪面を登って見たけどピークからは切れ落ちていて登れずクライムダウンした。岩を登るしかないと思い、岩にスリングをかけて「大丈夫、私は落ちない。」と言

い聞かせながらリードする。我々はチビだから、足は寸足らずだし、ホールドに手は届かないし、非常に苦勞する。カムがあつたらAOするのに、と思うがそんな準備はしていないし。登ったり、降りたりを繰り返

し、泣きそうになりながらも何とか登りきれた時はホッと

した。そこから懸垂し、八ツ峰の頭への登りも最初は雪面で、ちょっと斜度がきつく、踏み込んだところから雪が崩れる。YIちゃんが登れないので、「足が決まってない上にハイステップになってるから崩れる。ちゃんと足場を固めてさっさと登ったほうがいい。」とアドバイスする。それでも苦勞していたので、アックス 2 本とスノーバーも使って何とか登ってもらった。そうこうして時間が掛かり、八ツ峰の頭に着いたのは 13 時だった。予定より大幅に遅れているが、天気は良いし、本峰経由して平蔵谷から下るなら行けるだろうと思っていた。しかし、「これ以上早くは歩けません。精一杯です。私は目標の八ツ峰に登れたんで十分です。剣の頂上に拘りはありません。」と訴えてきた。地図を見ながら、どれも長いけど長次郎谷をひたすら下るほうが早いと思うし、剣沢キャンプ場では我等の事を心配している仲間がいるので、日没前に戻れるルートにしようと思った。その後、YI ちゃんは涙してしまった。本人曰く、緊張が少し和らいだとの事だった。ずっと、緊張していたとは気が付かなかった。そこから、長次郎谷雪渓下りと剣沢雪渓の登り返しで 5 時間掛かった。私はそんなに疲れてないし、翌日も天気良いから登りたい気持ちはあったけど、まあ、これはこれでいいのかもしれない。

5 日：岳連の仲間は天気がいいからもう一泊して、八ツ峰を登りに行った。我々は下山して、富山に宿を取り、美味しいものを食べる事にした。富山の友人に連絡し、立山駅まで迎えに来てもらう段取りをする。立山駅の日帰り入浴するところはコロナ以降やってないの



で、室堂に荷物をデポしてみくりが池温泉に入る。温泉から戻ってきたら、立山行の高原バス待ちの行列が階段の最上段まで出来ていた。GW はそんなものなのかもしれない。仕方なく並んで待っていると石川県の地震で室堂も揺れる。そのせいで、ケーブルの点検が終わるまでお待ちください、とアナウンスが流れる。なんやかんやとハプニングはあったけど、立山経由して富山のホテルに宿泊した。

女同士のアルパインは何かと大変だけど、おしゃべりが弾んで楽しい。今回は天気に恵まれ良い条件ではあったが、雪は少なく、ミックス状態で逆に難しかったのかもしれない。過去に登った経験から、雪稜メインだから登攀装備はさほど必要ないと判断してギアを間引いた。しかし、他の人たちはカムやヌンチャクをしっかり持ってきていたので、準備不足だったのかもしれない。昔なら遅くまで登って皆さんに心配かける山行ばかりしていたけど、抑えられるようになってただけ成長したのかもしれない。コロナでここ数年たいした山行が出来ていなかった。次回チャンスがあれば、全装備担いで 1・2 峰間ルンゼから登って、本峰経由する縦走がやりたいな。誰か付き合ってくださいませんかね。

## 小豆島 赤嶽

2023年4月29日～5月3日

岳友 IN MA (記)

4月29日(土)

今日は草壁で開拓中の岩場へ SA さん、MO ちゃんに案内してもらおう。礫岩という岩の性質を考慮して、ボルトについて IN さんに教えて貰いたいというお話。岡山の TI さん始め開拓の主要メンバーも集まり豪華な顔触れ。アーチありケイブありの立体的な構成の岩場で、公開はまだ先のようにです。

4月30日(日)

昨日の雨風は朝には収まり、初めての赤嶽に向かう。駐車場でまた TI さんにお会いできた。今日は朝日新聞の記者の方を取材で案内するので一緒にどうぞとの有難いお言葉。40分程のアプローチの大部分は歩き易い山道だけど、所どころ足を滑らせてはいけない箇所があり泥濘んでいるので注意して行く。岩場の直前はフィックスロープがあるのでハーネスを付けてセルフビレーを取れるようにしておくとい。

フィックスが終わって見上げると突然ジャンボリーケイブがのしかかって来る。こんなところ人間が登る？いやいや、そんな！という感じ。

今日は岩場の偵察の後、左岩壁のガジュマル 10d と日々是好日 11c の 2 本を登る。岩質は安山岩、まだ新しい岩場だからかフリクションはかなり良く、手も足も好きに使える。

5月1日(月)

昨日の偵察で目を付けていたデクラス 12a に取り付く。めったに機会のないオンサイトトライ、とにかく楽しんで精一杯頑張ろうと思う。途中から集中力が高まってきて自分と目の前の壁以外が世界から消えてなくなった。終了点にクリップした後、岩の上に立ち上がって振り返るとキラキラ輝く海、思い切り深呼吸したら胸が一杯になった。

この日は他にオリーブ LINE 11d もトライしたものの、集中力に欠ける登りで落ちてしまった

5月2日(火)

昨日の反省から狙いは 1 本に決める。今日はジャンボリーケイブ端っこのステイゴールド 12a。下部の礫岩はいかにも崩れそうに見えるので出来る限り静かに登る。続く垂壁部分もボルトが遠く緊張するが上手くこなせた。ハング帯も足で上手く高度を上げられて「あ、これ登れそう」と思っていたら後 3 手程の所でうっかり落ちてしまった、残念！詰めが甘い！

5月3日(水)

最終日、右岩壁の船中八策 11c にトライする。このルートはグレードでは計れない濃い内容で、今までのクライミングの経験値全てを出し切ったと言っても大袈裟ではないように感じたし、

登り終えてのこれほどの充実感も初めての経験かも知れない。

今回初めての赤嶽はどのルートも面白く楽しめました。反面、メインの壁は眺めるしかなく残念でした。この壁のど真ん中に取り付ける実力が欲しいと強く思いました。

### ※エリア情報

・事前に小豆島クライミング協会のサイトを確認してから行くと良いと思います。またインスタをフォローしておくで最新の情報が得られます。

・駐車場は電波が良くないので予め電波の良い所で利用申請して行かれる事をお勧めします。

・日陰は寒いくらいで薄手のダウンを着ていました。14 時頃から日が当たり始めると暖かくなります。

・スモールサイズのカムは何かと使えます。またスリングも数本あった方がいいです。

・ルートによっては残置ピナがなく結び替えの必要な場合があります。

・岩が欠け易いのでビレイヤーはヘルメット着用を推奨します。(私は駐車場を出てから帰るまで被ってました)

### ※ルート情報 (今回自分が取り付いたルート)

左岩壁

ガジュマル 10d★

ルートファインディングを間違えると難しい。弱点を辿れば合理的で面白く登れます

日々是好日 11c★★★

クラック、コーナーを足で登っていく出だし、ランナウト気味の間中部はライン取りが肝、後半の薄被りは絶妙に配置されたホールドに導かれて、終了点から振り返ると小豆島の穏やかな海、好ルートです！結構パンプします

デクラス 12a ★★★

一段上がった取り付けから登ります。セルフビレー、0 ピンを取ることをお勧めします(スリング、カム等で構築)。ライン取りもムーブも面白く、登り終わって岩の上に立つ満足感は格別です。露出したカンテなので風当たりが強い。

オリーブ LINE 11c/d ★

立体的な動きと足技が要求される下部、垂壁に散りばめられたホールドを丁寧に辿る上部。充実の内容です。出だしのクラックにエイリアンを使いました。

ジャンボリーケイブ

ステイゴールド 12a ★★★

下部の礫岩は慎重に、垂壁部分も侮れません。ハング帯は足捌きに左右されます。全体に脆さを感じるので注意が必要です。

右岩壁

瀬戸内宝探し 10d ★

～船中八策 11c ★★★

繋げて登るとビレー点から船中八策のルートは全く見えませんので、不安な場合はビレイヤーも10dの終了点まで登ってビレーした方が安全かと思います。身長160cm程度だとマスターはとて苦勞します。

ルートの読み、安全か危険か自分の実力の見積り、ムーブの組立て、これまでの自分のクライミングが試されます（大袈裟かな^\_^;）

---

## 記憶に残る山（千丈ヶ岳南西壁）

### MI

年末年始に冬山に入らなくなって久しい。そろそろ終活の意味も込めてこれまで登ってきた山登りを時代背景も含めながら振り返ってみたい。

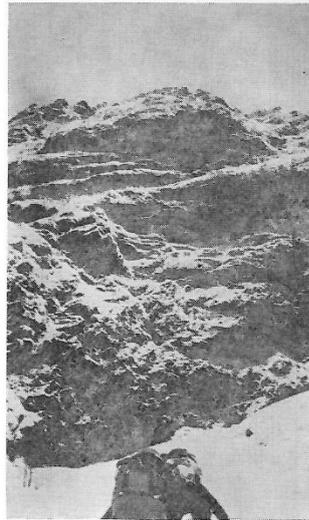
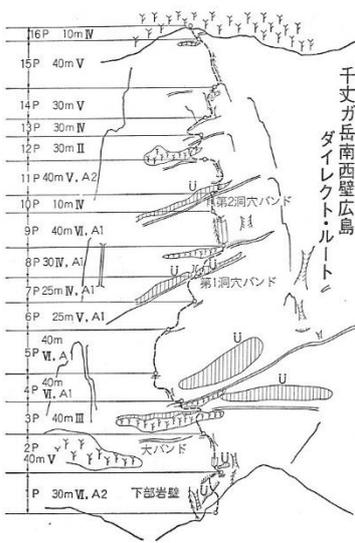
20才で須磨労山の前身であるWV（ワンダーフォーゲル）六甲に入会して50年近くになるが、まさかこんなに永く山登りを続けるとは思いませんでした。私が入会した頃のWV六甲は20代の若者が中心でしたが、岩登り（当時はまだクライミングとは言われていなかった。）をする人はいないし、冬山も初めて山小屋泊で八ヶ岳に登ったばかりで六甲のハイキングが主な活動でした。そのため、岩登りや雪山技術は県連の取り組みに参加して研くしか道はなかった。当時、県連では各会のリーダー養成のために教室が取り組まれていた。（1期で約6カ月）私は1期と3期に参加した。

そして、3期の修了山行中に事故が起きて（1名死亡、4名が凍傷で手足の指を切断）私は手足の指11本を切断した。当時私はまだ22才と若かった。

ここで山から足を洗っていれば現在の私は無かった。

1977年末の或る日、当時、連盟の理事長だったSK氏から電話があつて喫茶店で会って、県連盟の山行面での現状（当時は多くの山の会では厳しい冬山や岩登りは取り組まれていなかった。）や、日本の登山界の現状等の話しをされ「労山でも山に登ばらなああかん」そのため、一緒に登ろうと延々と口説かれた。しかし、私はまだ山の経験がなかったし、凍傷で指を切っていたこともあつて、一緒に登る自信がなかったので断ったが、その後もしつこく説得されて一緒に登ることになった。私と共にHN氏（元某山岳会）も一本釣りされていた。

「岩と雪 49号」より



千丈ヶ岳南西壁正面

そして、3人で78年5月の連休に海谷山塊にある千丈ヶ岳南西壁の広島ダイレクトルートが計画された。ところで、今の人に海谷山塊って何処にあるのかと聞いても、多くの人は知らないでしょう。

海谷山塊は新潟県南西部に位置して姫川を挟んで明星山と反対側にある。糸魚川市駅でタクシーに乗って30分ほどで、御前山部落の奥にある発電所に着く。ここより歩いて15分で山境峠に着くと、目の前に千丈ヶ岳南西壁がドーンとド迫力

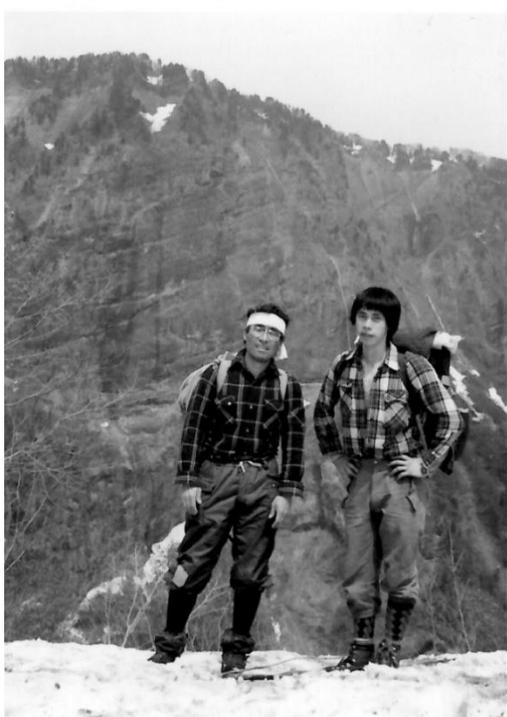
で聳えている。岩質は角礫凝灰岩と呼ばれている粗悪なコンクリート状な岩である。意外とグリップ力は良いが、如何ともしがたく脆いが故に、現在のクライマーには敬遠される所以でしょう。

脆い岩なので開拓には長いボルトや工業用ボルト等、特殊な用具を駆使して拓かれている。「岩と雪」49号に広島山の会による同壁の冬季初登攀(75~76年)の記録が載っている。広島山の会は当時、岡山クライマーズクラブと共に西風と呼ばれていた実力ある山岳会でした。奥鐘山西壁や潤沢岳幕岩でルートを拓き、海外でもラトックⅢ峰の初登が有名です。そんな壁にHNもそうだが、私なんて本番は前年の三の窓でのクライミングしか経験が無いので不安一杯でした。

5月2日の夜、「急行きたぐに」22:10大阪発で出発した。当時は自家用車で行く人は限られていて多くの岳人は電車利用でした。同壁の冬季初登を狙っていた12月末の「きたぐに」ではさっそく通路に寝ていたら、途中から乗って来られた帰省のオバサンに「人をよう跨がん」と叱られた事がありました。

3日 下部岩壁の3Pは何とか登れてビバーク。4日4P目より大きくルートをハング帯の右に取り過ぎ、気付いた時にはもうかなり登っていて(7P目)、広島ダイレクトルートに戻るには遅すぎた。やむなく右側の支稜沿いに登って終了する。下降は千丈ヶ岳と旗振山との中間付近で樹木を支点として懸垂下降で6P、支点の無い所はボルトを打って作った。

この壁にはその後、10月8日~9日で同じ3名でやってきて広島ダイレクトルートを登った。この時は1日目で7P登って、翌日の為にもう1P登ってロープをFIXして第一洞穴バンドでビバーク。翌日は2Pで第二洞穴バンドそして、12時頃に樹林帯に入って終了。下降は5月の場所を探して懸垂下降7Pで降りたつ。



山塚峠でのSK氏(左)とHN(右)

後続はユマーリングで登ってきた。3P目も私がリードする。5月の時にHNが打ったボルトが見つからない。その間もチリ雪崩が襲ってくるがブッシュにしがみついで耐える。諦めかけた頃に振り払った雪の下からボルトが現れた。そして、3m程の垂壁を登りきると膝までのラッセルが始まる。すぐに股下ぐらいになる。なんとか下部バンドに辿り着いてブッシュで確保を取る。最後のHNが辿り着いた頃にはもう真っ暗になっていた。すぐにツェルトを張って中に入る。

30日 雪は降りやまないし、風も出てきている。ピバーク地から見上げた壁は辺り一面、真っ白に変貌してしまった。こうなれば早く下山するのみ。取り付き点まで懸垂下降する。

来るときは渡れた海川が降雪のためにダムを取り入れ口を開け放水したのだろうか、水量が増えて渡れない。そのために2時間ほどかけてピッケルで木を倒して架橋を作って対岸に渡る事が出来た。しかし、雪は腰ぐらいまで積もっていて峠までラッセルに次ぐラッセルでなんとか峠に着いた。この日は発電所に頼み込んで倉庫で寝かせてもらった。その上、濡れた衣類まで乾かせてもらった。(古き良き時代でした。)

11月25日～26日 今回はHNと二人で冬季登攀に備えて正面壁中央稜を登った。アイゼンは不要だったので発電所のゴンドラ付近にデポしておく。取付き点の流水溝に「1978年11月大阪鋭峰会」と書かれた赤布があった。

同年12月28日同じく「急行きたぐに」で冬季初登攀を目指して大阪駅を出発する。29日下部岩壁をいつものようにNHがトップでアイゼンを着けずに登る。彼が登り出してすぐに日本海特有のボタン雪が降り出してきた。1時間ほどたってコールがあつて、私はアイゼンを装着して登るが、手袋は湿雪のためにすぐにグチャグチャになってしまう。2P目は私がリードする。確保支点までが遠く最後は、はいくつばって辿り着く。



私は翌年の秋に黒部川の渡渉中に掴んだ枝が折れて転落して肘を骨折してしまい、翌年の冬季登攀には参加出来なかったが、後の2人は冬季初登攀を成功させて雪辱を果たした。その後、再びこの地を訪れる機会はなかったが、思い出に残る山であった。SK氏から誘われなかったら今の自分はなかったと思うし、HNとはその後、冬季の屏風岩や海外登山でも一緒に登ったが、彼は確実に私より岩登りが上手かったし、体力もあった。同年でいいライバルで彼の存在も欠かせなかった。

---

## オフビレイ

### 編集後記

今号は雪山の記録2本とMAさんから小豆島の赤嶽の記録を戴きました。小豆島といえはこれまで吉田の岩場か拇岳、インスボンでしたが、新しく高グレードの岩場が開拓中とのこと。MAさんが登られたルートとエリア情報が書かれているので興味のある方は参考にしてください。

また、私の過去の山記録（記録といえるかどうかわかりません。）拙文ですが、一読いただけたら幸いです。

表紙の写真は10年前にTIさんが登られた時の写真です。当時と比べて今年はだいぶ雪が少なかったようです。

11日に県連の第60回総会が開かれ、代議員としてMAさんとMNさんが出席されました。そして、私が引き続き会長を、TYさんが副理事長、理事にMNさんと今季から新しくH会長が理事に就任しました。よろしくお願いいたします。

先日、梅田の映画館で「ライフイズクライミング」を観てきました。これは視覚障害者の小林幸一郎氏とサイト（視覚）ガイドの鈴木直也氏によるアメリカユタ州のインディアナクリークのクラックルートを登るのを中心に彼の日常生活も含めて撮られています。目の見えない小林氏がクラックルートをリードしている場面がありました。ジャムを決めながら、カムを選びそれをクラックに決め、ロープを通す一連の作業ですが、観ているこちらの方も思わず緊張しました。登り終えた時の氏の喜びは何とも言えませんでした。

山っ子通信— 33号—

発行元 須磨勤労者山岳会（兵庫県勤労者山岳連盟）

発行人 H H

編集人 M I